

(別紙様式3)

平成31年3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 福井県福井市大手3丁目17番1号
管理機関名 福井県教育庁
代表者名 教育長 東村 健治



平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日（契約締結日）～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 福井県立高志高等学校

学校長名 平松 正尚

3 研究開発名

ふくい発、東アジアの発展と希望に貢献するグローバル・リーダーの育成

4 研究開発概要

本校の校訓「克己・創造・敬愛」に基づき、日本および世界の平和と繁栄、国際協調に貢献する「知・徳・体の調和のとれた国際社会及び地域社会のリーダー」を育成する。

「克己（自律した）・創造（問題を解決できる）・敬愛（他者を理解し尊重する）」の校訓に基づき、「ふるさと福井、日本語・日本文化に誇りを持ち、グローバルな視野を持って新しい分野にチャレンジし、社会にイノベーションを起こす人」を育成すべきグローバル・リーダー像として掲げ、東アジア諸国の経済や生活文化等に関する課題研究を重視した教育課程の研究開発、英語力・グローバルマインド向上の取組、国際交流活動、社会科学系部活動の振興等により、地方の公立高等学校によるグローバル・リーダーシップ教育モデルを構築する。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
運営指導委員会の開催・運営								①			②	
海外交流アドバイザー等の雇用	→											
図書購入費等の補助	→											
海外研修費の補助												○
テレビ会議システムの導入	→											
S G H事業の普及と啓発	→											

(2) 実績の説明

①事業管理

年間を通して、S G H事業における進捗管理、継続的な指導助言、予算の執行管理を行った。

②運営指導委員会の開催・運営

平成30年11月1日(木)に第1回運営指導委員会を開催し、課題研究の進捗状況や今年度の成果と課題、改善点などについて運営指導委員から指導・助言を受けた。また、運営に係る支援としては、平成31年2月6日(水)2年生「グローバル探究」課題研究成果発表会へ指導主事等を助言者として派遣した。なお、平成31年2月18日(月)に第2回運営指導委員会の開催し、S G H5年間の取組みにおける成果および指定終了後の取組みの在り方について、運営指導委員から指導・助言を受けた。

③海外交流アドバイザーの雇用等の人的支援

平成30年度も、本格化する海外研修や海外の高校等との交流のために、海外交流アドバイザーを1名雇用した。また、平成27年度から引き続き、ALTを2名配置し、英語力向上を支援している。

④図書購入費等の補助

英語を使って国際交流する機会を設けながら生徒の主体的な英語学習を促す「English Fun Time」の年間10回の開催等に係る費用を補助した。

⑤海外研修費の補助

本県の高校生100名がカナダバンクーバーで2週間の語学研修やホームステイ等を行う「福井県高校生海外語学研修」に高志高校生10名を派遣し、研修に係る費用の半額を補助した。

⑥テレビ会議システムの導入

平成27年度にテレビ会議システムを導入し、国内のS G H指定校およびオーストラリアをはじめとする海外の高校の高校生とコミュニケーションを図り、1か月分のテレビ会議システムリース代を補助した。

⑦SGH事業の普及と啓発

平成31年3月15日（金）に行われた1年SGH「K o A - S（SGH）」学習成果発表会においては、県内の全ての小中学校にも案内し、事業への参観をよびかけるなど、年間を通じてSGH事業の普及と啓発を行った。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
「K o A - S ・ I」 (1年)			連絡調整・計画立案			連携授業 大学訪問		連携授業に関 するリサーチ		まとめ	成果 発表		
「グローバル探究」 (2年)	研究テーマ 練り上げ		仮説の設定・検証 グループ研究			海外国内FW グループ研究		中間 発表	グループ研究 (まとめ)		研究 発表		
「グローバル探究」 (3年)	個人課題研究 レポート作成		発表		ディスカッション 意見作文（英語）								
「英語活用BE」	授業実施												
「グローバル英語 II・III」	授業実施												
各教科の授業改善	随時公開授業・教科別研修 「探究学習に関する校内研修会」												
グローバル ライブラリー											書籍 購入		
英語コミュニケー ション能力の向上	English Fun Time (EFT) 各月実施				EFT 各月実施								
グローバル講演会		講演	講演	講演			講演				講演		
課外活動	学術論文輪読会 レポート作成 プレゼン練習		出張授業 ビジネスプラン作り			ビジネスプラン 作り							
海外大学進学支援	随時面談等												
海外研修・姉妹校	訪問先との事前協議 生徒対象事前指導					研修 旅行	生徒対象 事後指導						
成果発信・広報			SGH NEWS				校外 発表	SGH NEWS			校内 校外 発表	SGH NEWS 校外 発表	
	HP更新												
海外留学支援	随時												
検証・評価	意識 調査		英語 検定	GT EC			英語 検定	意識 調査	GT EC	英語 検定	意識 調査		

(2) 実績の説明

①SGH生徒の選定

- ・1年生普通科248名のうち80名をSGH対象生徒に選考
- ・2年生普通科236名のうち、1年次にSGH対象生徒となった80名を継続
- ・3年生普通科223名のうち、1年次にSGH対象生徒となった80名を継続

②課題研究にかかる授業等

ア. 1年生「K・A・S・I」(学校設定科目)

- a. 大学・企業との連携授業(平成30年9月～平成30年10月実施)
- b. 京都大学大学院訪問(平成30年11月7日(水)実施)
- c. 学習成果発表会(平成31年3月15日(金)実施)

イ. 2年生「グローバル探究」(総合的な学習の時間)

- ・課題研究の実践
 - a. 研究テーマの設定(4・5月)
 - b. 仮説の設定・検証(6・7月)
 - c. グループ研究(6月～2月)
 - d. 海外・国内フィールドワーク(10～11月)
 - e. 中間報告(12月)
 - f. 課題研究発表会(2月)

ウ. 3年生「グローバル探究」(総合的な学習の時間)

- a. 英語レポート作成(4～6月)
- b. 課題研究発表会(7月)
- c. 英語によるディスカッションおよび意見作文(9月～1月)

エ. 「アジアの歴史・経済」「アジアの自然・文化」(2年生学校設定科目)

- ・課題研究を知識・内容面で支援するための科目として実施

オ. 「英語活用BE(Basic Expression)」「グローバル英語Ⅱ・Ⅲ」(学校設定科目)

- ・課題研究を英語運用能力の観点から側面支援するための学校設定科目として実施

③グローバルマインド・英語力向上のための課外活動等

ア. English Fun Time(年10回実施・希望生徒対象)

イ. グローバル講演会(全生徒対象・6月)

NPO法人 TABLE FOR TWO International 職員 大宮 千絵 氏

「TABLE FOR TWO おにぎりアクション 日本の力で世界を変える仕組みの作り方」

ウ. グローバルミニ講演会(希望生徒対象) 年4回実施

④海外フィールドワーク・国際交流

ア. タイ研修(平成30年10月21日(日)～10月28日(日))

イ. ベトナム研修(平成30年10月21日(日)～10月28日(日))

ウ. オーストラリア研修(平成30年10月20日(土)～10月28日(日))

エ. カセサート大学附属学校(タイ)生徒受入(平成30年12月10日(月)～12月14日(金))

オ. AFS留学生(アメリカ)受入(平成30年9月～平成31年1月)

⑤国内フィールドワーク

東京研修(平成30年10月22日(月)～10月26日(金))

⑥施設・設備

グローバルライブラリーとして、本校図書館の一角にSGH課題研究に役立つ書籍を配架した。

⑦成果発信・広報

ア. 本校ホームページ上での授業・課外活動等の取り組み紹介

イ. 「SGH NEWS」の発行(7月、12月、3月)

ウ. 「SGH課題研究レポート集」および「SGH研究開発報告書」の発行

⑧海外留学・海外大学進学支援

ア. 「福井県高校生派遣事業」(福井県教育委員会主催、2週間)に2年生生徒10名が参加

イ. 長期休業等を利用して海外へ短期研修に出かける生徒が4名いた。

⑨検証・評価

ア. 「グローバル探究」

- ・「『グローバル探究』で育てようとする生徒の能力および態度」による評価
- ・「『グローバル探究』に関するアンケート」（1・2年生）による検証

イ. 英語力

- ・GTEC for STUDENTS
(1・2年生全生徒 7月・12月実施 3年生全員 7月実施)
- ・GTECスピーキングテスト(1年生・2年生全員 12月実施)
- ・英語検定(年3回)

ウ. 論理的思考力・表現力

- ・GPS-Academic(1・2年生全生徒対象 12月実施)

エ. 生徒の能力や行動等に関する自己診断

- ・「高志高校生の意識・実態調査」
(1年生：4、2月 2年生：11、2月 3年生：7月実施)

7 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 生徒の変容

「SGH生徒対象アンケート」や「高志高生の意識・実態調査」より以下のとおり分析した。

①グローバルな課題への理解、興味・関心

1年生では、昨年度まで2単位の「グローバル探究」において東アジアに関する探究学習を行ってきた。しかし、本年度は、学校設定科目「K o A - S ・ I」1単位となったことから、東アジアや世の中の諸事情について学ぶことの意義や重要性を認識させることが十分には行えなかった。

一方、2・3年生では、「異文化交流・異文化理解」や「グローバルな視野」に関する質問項目のすべてにおいて肯定的に回答する生徒が半数を超えており、グローバルな諸問題や課題に前向きに取り組む姿勢が現れたと考えられる。

②学習意欲

いずれの学年においても、「自分たちの行った課題研究をさらに深く調べたい」「違った角度から考えてみたい」、「提案した企画を実行できるようにしたい」など、さらに深く追究したいという学習意欲の向上を感じさせる回答が多く見られた。

③将来の進学・就職等に対する意欲・意識

次のような結果が得られた。

(上段：全体 下段：SGH生徒 1・2年は2月 3年は7月の結果より)

質問項目	1年	2年	3年
将来、留学したり、仕事で国際的に活躍したりしたい。	47.1%	42.1%	42.7%
	59.0%	50.0%	59.4%
新たな仕事やサービスを考え出したり、社会にイノベーションを起こしたりする仕事がしたい。	44.7%	37.6%	42.3%
	39.2%	42.6%	51.9%

学年によって差はあるものの、SGH生徒は全体よりも高い傾向を示している。1年生において「新たな仕事やサービスを考え出したり、社会にイノベーションを起こしたりする仕事がしたい」が全体より低い理由としては、今年度、併設型中学校より入学してきたより意欲の高い生徒たちが全員SSH教育課程で履修しているためであると考えられる。

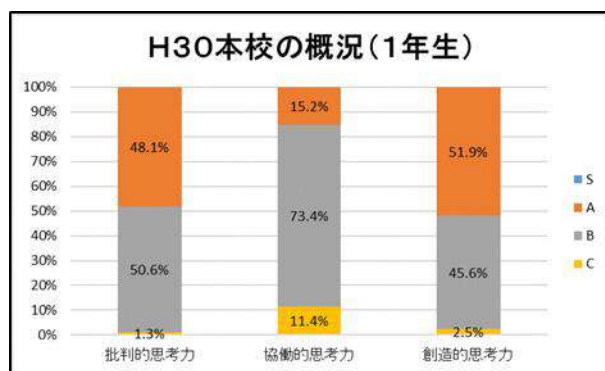
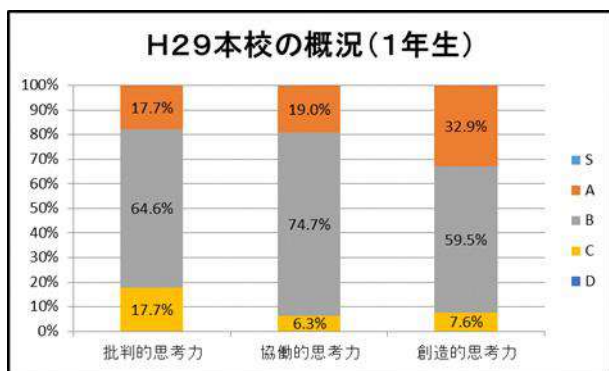
④海外での学習・海外研修等に関する意識

本年度は、本校SGHおよびSSH海外フィールドワークのほかに県教育委員会主催の海外語学研修などに合計159名（平成29年度は186名）が参加した。また、個人で海外研修等に参加した生徒が4名いた。個人の参加はそれほど多くないが、生徒の中に少しずつ海外志向が育まれつつある。

⑤論理的思考力、判断力、表現力、想像力

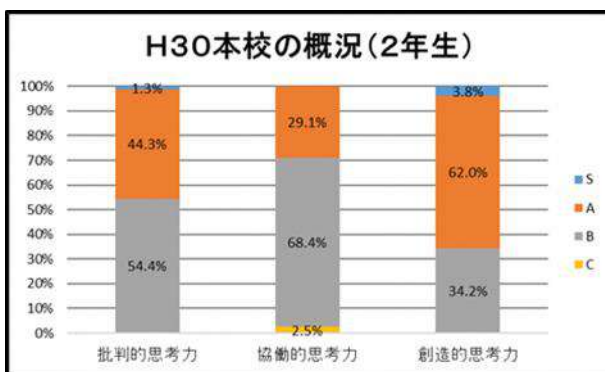
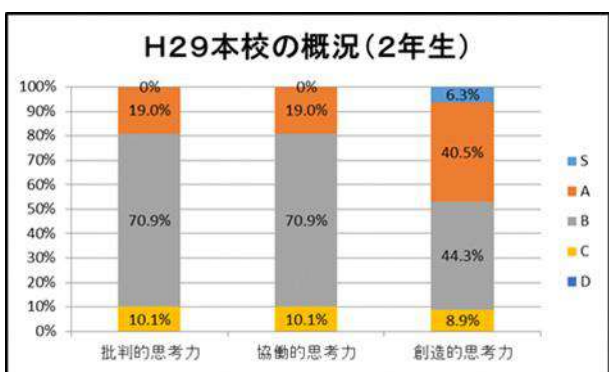
1年生では、自己診断において問題発見力や課題解決力、協働力や情報整理力、他者の考えを受け入れる姿勢に関して、昨年と同じように多くの生徒が身に付いたと回答した。一方で、授業時に発表活動の場面が減少したことで、聞いたことや調べたことを整理する活動にとどまり、自分たちの独自の考えを述べるに至っていない部分が見られた。質疑応答があまり積極的に行われなかったといった現状を勘案し、今一度、「質問する力」をどう育てるのかについて担当者間で考えていく必要がある。

また、12月に行ったGPS-Academicの結果を昨年同時期に受けた1年生（現2年生）と比較した（下グラフ参照）。昨年と比較すると批判的思考力・創造的思考力でA評価を受けている生徒の割合が増加しており、現時点で高い能力を持っていることがわかる。今後は、この能力をどのようにさらに伸ばしていくのかをしっかりと考えていきたい。



2年生では、12月に行ったGPS-Academicの結果を昨年同時期に受けた2年生（現3年生）と比較した（下グラフ参照）。批判的思考力においては、昨年度S評価を受ける生徒がいなかったが、今年度はS評価の生徒が出るとともにA評価も大きく割合を伸ばしている。同様に創造的思考力においてもA評価の生徒の割合が大幅に上昇した。一方で、協働的思考力の伸びは小さく、1年間のグループワークを通してこの思考力をどう向上させるかが今後の課題である。

3年生でも意識・実態調査より多くの生徒が論理的思考力・表現力等の力が身についたと感じている。



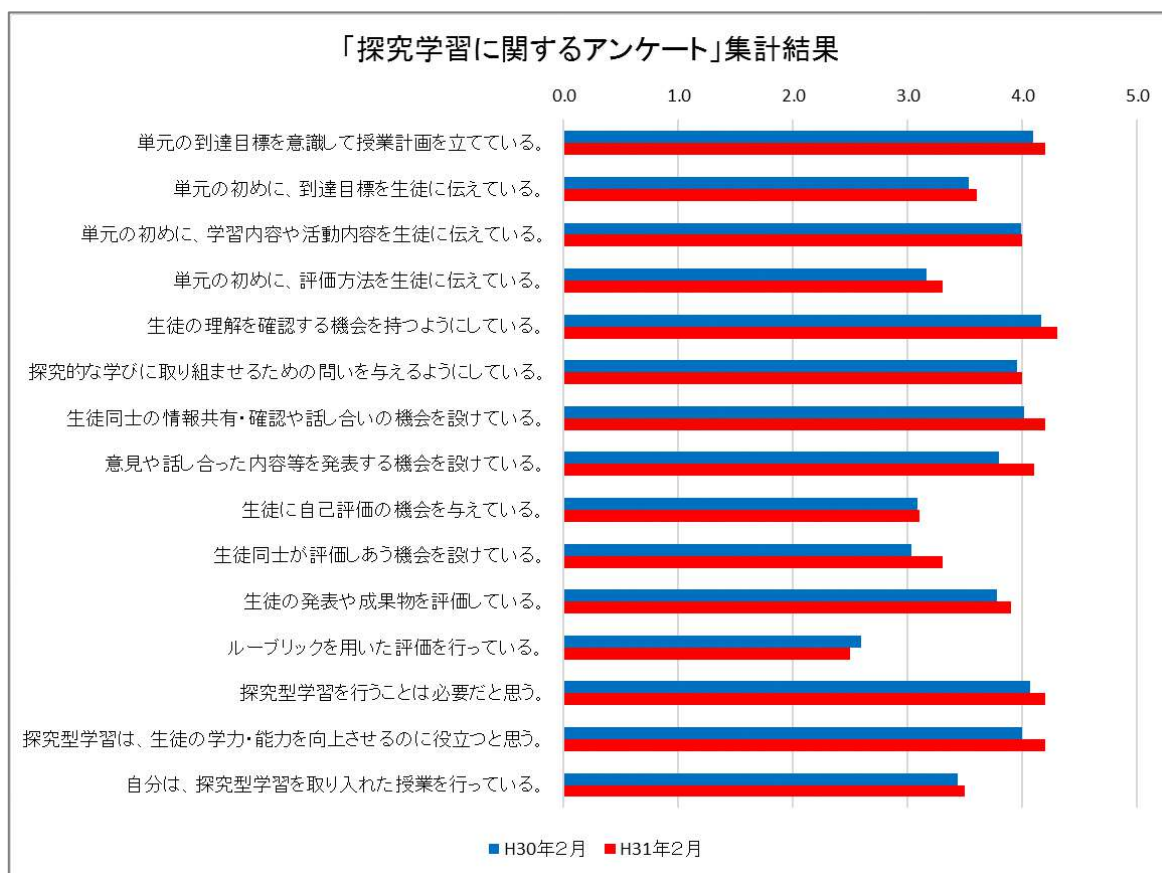
⑥英語コミュニケーション能力

本年度行った GTEC for STUDENTS の結果を見ると、1 年生では昨年度の 1 年生（現 2 年生）と比べ Listening、Writing では大きな伸びが見られた。2 年生では、7 月から 12 月にかけて Reading、Listening、Speaking において上昇傾向が見られた。トータルにおいても S G H 生徒の約 70% が GRADE5 以上となった。海外フィールドワークでの実践的なコミュニケーションを経験したことが影響していると考えられる。一方、Writing では GRADE5 の生徒が増加しているが、GRADE6 および GRADE7 の生徒はおらず、指導の改善と充実を図る必要がある。3 年生は、トータルにおいて GRADE6 および GRADE7 の生徒が増加しており、順調な伸びを示している。一方で、2 年生と同じく Writing においては GRADE6 および GRADE7 の生徒はおらず、3 年間を見据えた指導の在り方を考えなければならない。

(2) 教員および学校の変容

平成 31 年 1 月に、全教員を対象に「探究的学習に関するアンケート」を行った。その結果、前年と同様に全体的に「とても当てはまる」「まあ当てはまる」と回答している割合が多く、本校において教員の間にも探究的な学習への理解が定着してきたことがうかがえる。

また、自由記述からは S G H 事業に携わった多くの教員から、グローバル人材育成の必要性と S G H の有効性を認める記述を得た。教員の意識の高まりが見られる一方、教科指導との関連性に言及する教員も一定数おり、指定終了後も「探究学習に関する校内研修」等を継続して、探究学習と教科学習の連携を一層図る努力が必要である。



(3) 大学・企業とのネットワーク

大学との連携では、東京大学社会科学研究所、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、福井大学産学官連携本部、福井県立大学地域経済研究所、東京外国語大学、立教大学など各大学との連携

は順調に進んでいる。また、海外においてもカセサート大学（タイ）、ホーチミン市師範大学には海外研修の際、毎回訪問を行っている。特に、福井大学産学官連携本部は、今年度も福井経済同友会と連携して本校SGHに全面的に協力していただいております、課題研究をさらに前進させることができました。

企業との連携においても、1年生「K o A - S ・ I」連携授業で今年度、新たに1社の協力を得ることができた。また、2年生「グローバル探究」の課題研究では、福井経済同友会がオリエンテーションや仮説の設定、中間報告会、最終報告会など様々な面で関わっていただき、課題研究の指導に協力していただいた。また海外フィールドワークでも福井県に本社を置く企業に協力をいただき、課題研究を進めることができた。今年度でSGHの指定は終了するものの、探究的な学習は今後も続けていくため、これらの企業には平成31年度も協力を依頼する予定である。また、新たな協力企業を探し、本校の探究的な学習をさらに前進させていきたい。

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

本校ではSGH指定に伴い、課題研究を効果的に進めるために、学校設定教科「グローバル」を開設した。また、以下のような学校設定科目を設置し、日本の文化や産業を適切に説明する訓練、文章の速読・要約やレポート・プレゼンテーション等の作成、ICTの活用による資料データの処理に関する学習などを行い、課題研究を言語運用面、情報活用面から側面支援する授業を行った。また、グローバルな社会問題や時事的なテーマ等を扱った英文から必要な情報や要点をとらえたり、情報や考え等を英語で効果的に伝えたりする学習を行い、課題研究を言語運用面、情報活用面から側面支援した。

※学校設定教科「グローバル」のカリキュラム

各教科	学科・類型		普通科文系				普通科理系			
	科目	学年 標準単位	1	2	3	計	1	2	3	計
◎グローバル	◎グローバルリテラシー	1	1			1	1			1
	◎グローバル英語Ⅰ	3	3			3	3			3
	◎グローバル英語Ⅱ	3		3		3		3		3
	◎グローバル英語Ⅲ	2			2	2			2	2
	◎アジアの歴史・経済	1		1		0・1		1		0・1
	◎アジアの自然・文化	1		1	1	0・1		1	1	0・1

※教科「グローバル」に関する学校設定科目

教科名	グローバル	科目名	グローバルリテラシー（略称：GL）
履修学年及び履修単位	1年次1単位（通年）		
開設の理由	課題研究に取り組むにあたり、電子情報の収集と活用、文献読解と論文・レポート作成、プレゼンテーション等の言語運用能力の育成の観点から側面支援するため。		
目標	日本の文化や産業を適切に説明できる国語力を育てる。また、日本語の文章を読み書きする中で、必要な情報を取り出し、解釈・統合し、熟考・評価する能力を育てるとともに、電子情報の収集と活用に習熟して、適切に表現するためのスキルを身に付ける。		
内容	<p>①ふるさと、日本の文化や産業を適切に説明する訓練を行う。</p> <p>②課題研究の意義、課題研究のプロセス、研究の進め方等を理解し、3年間の課題研究活動を見通す。</p> <p>③基本文献の読解、要約作業による「情報の取り出し」「解釈・統合」「熟考・評価」にかかる基本的な言語スキルを習得する。</p> <p>④レポート作成訓練によりクリティカルリーディング、ロジカルシンキング、クリエイティブライティングの基礎力を育成する。</p> <p>⑤課題研究に必要な、情報収集、分析、整理等の言語スキルを向上させる。</p> <p>⑥課題研究発表に関連して、プレゼンテーション、ポスターセッション等多様な話し合い形態の場で必要となる言語スキルを習得する。</p>		
指導方法	国語科の教員2名によるチームティーチングで指導する。		
年間指導計画	1年次前期	上記①、②、③、④の学習指導	
	1年次後期	上記①、③、④、⑤、⑥の学習指導	
既存の教科・科目との関連等	<ul style="list-style-type: none"> ・「社会と情報」の代替科目として、「社会と情報」の指導事項のうち、（1）情報の活用と表現の内容を指導する。 ・「国語総合」との関連に配慮して指導する。 		

教科名	グローバル	科目名	グローバル英語Ⅰ（略称：G英Ⅰ） グローバル英語Ⅱ（略称：G英Ⅱ） グローバル英語Ⅲ（略称：G英Ⅲ）
履修学年及び履修単位		グローバル英語Ⅰ	1年次3単位（後期）
		グローバル英語Ⅱ	2年次3単位（通年）
		グローバル英語Ⅲ	3年次3単位（通年）
開設の理由	グローバルな社会問題や時事的なテーマ等を扱った英文の読解・聴解活動、レポート作成、プレゼンテーション等に取り組みさせることによって、課題研究を言語運用能力の観点から側面支援するため。		
目標	英語を使ってグローバルな社会問題等について理解したり表現したりする活動を通して、情報や概念等を解釈・応用・評価する高次の思考力・表現力を身に付けるとともに、効果的に表現する方法に習熟する。		
内容	<p>[グローバル英語Ⅰ]</p> <p>①ふるさと、日本の文化や産業等について英語で適切に説明する訓練を行う。</p> <p>②基本的な英文の読解・聴解活動を通して、概要・要点をとらえる学習に加え、情報伝達や意見交換などの基本的な言語スキルを習得する。</p> <p>③クリティカルリーディングに加え、レポート作成のためのロジカルシンキング、クリエイティブライティングの基礎力を養成する。</p> <p>[グローバル英語Ⅱ]</p> <p>④社会科学的なテーマを扱った英文について速読・精読したり、情報を比較・解釈・評価しながら読んだりするなど、目的に応じた読み方を身に付ける。</p> <p>⑤まとまりのある英文で情報や意見等を述べる力を身に付ける。</p> <p>[グローバル英語Ⅲ]</p> <p>⑥英文の課題研究レポート、英語による課題研究の準備を行う。</p>		
指導方法	英語科教員が指導（ALTとのチームティーチングを含む）		
年間指導計画	1年次後期	上記①、②、③の学習指導	
	2年次	上記①、④、⑤の学習指導	
	3年次	上記①、⑥の学習指導	
既存の教科・科目との関連等	<ul style="list-style-type: none"> ・「社会と情報」の代替科目として、「社会と情報」の指導事項のうち、（4）望ましい情報社会の構築の内容を指導する。 ・「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「英語表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」等既存の科目の指導事項との関連に配慮して指導する。 		

教科名	グローバル	科目名	アジアの歴史・経済（略称：A経）
履修学年及び履修単位	2年次1単位（通年）		
開設の理由	主に東アジア諸国の政治・経済の歴史的展開や日本との関係、現状等を系統的に理解することにより、課題研究を効率的に進めるため。		
目標	今後著しく経済発展が見込まれる東アジア諸国について、政治・経済に焦点を置きその歴史や現状について理解を深め、課題を整理し、東アジアの持続的発展について自分の考えを表現し、行動できる能力・資質を高める。		
内容	<p>①東アジア諸国の政治・経済に焦点をあて、各国の歴史、現状等について、系統的に学習する。</p> <p>②県内企業の経済進出、県内在住の外国人の経済活動等についても学習し、現状と課題について考察する。</p> <p>③連携先の大学、企業の外部講師による特設授業を実施する。</p>		
指導方法	地歴科および公民科が指導にあたる。 必要に応じて、大学教授、企業経営者等をゲストスピーカーとして招へいする。		
年間指導 計画	前期	上記①、②の学習指導	
	後期	上記②、③の学習指導	
既存の教科 ・科目との関 連等	現代社会、政治・経済		

教科名	グローバル	科目名	アジアの自然・文化（略称：A文）
履修学年及び履修単位	2年1単位（通年）		
開設の理由	東アジア諸国の言語・生活文化の歴史的展開や日本との関係、現状等を系統的に理解することにより、課題研究を効率的に進めるため。		
目標	今後著しく経済発展が見込まれる東アジア諸国について、言語や文化に焦点を置き、その歴史や現状について理解を深め、課題を整理し、東アジア地域に住む人々の希望の実現について自分の考えを表現し、行動できる能力・資質を高める。		
内容	①東アジア諸国の言語・生活文化に焦点をあて、各国の歴史、現状等について、系統的に学習する。特に、東アジアにおける漢字文化、東アジア諸国の食文化等に関する事象を重視して学習する。 ②県内在住の外国人を取り巻く言語・生活文化状況等についても学習し、現状と課題について考察する。 ③連携先の大学、企業の外部講師による特設授業を実施する。		
指導方法	国語科、地歴科、理科、家庭科の教員が指導にあたる。 必要に応じて、大学教授、国際交流機関職員等を講師として招へいして、特別講義を実施する。		
年間指導計画	前期	上記①、②の学習指導	
	後期	上記②、③の学習指導	
既存の教科・科目との関連等	国語総合、古典B、現代社会、政治・経済		

（2）高大接続の状況について

指定期間中を通し、東京大学社会科学研究所、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、福井大学大学院工学研究科、福井県立大学地域経済研究所からは1年生外部講師連携授業に講師を派遣していただいた。また、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科には毎年11月に1年生の訪問研修も受け入れていただいた。

また、福井大学産学官連携本部の竹本拓治准教授には、平成28年度より2年生の課題研究にオリエンテーション・仮説の設定・仮説の検証・社会調査の方法・中間発表・最終発表など様々な場面でご指導いただいた。竹本准教授には指定終了後も本校の探究的な学習の取組にご協力いただく承諾を得ている。

国内フィールドワークでは立教大学、東京外国語大学が、また海外フィールドワークにおいても、タイのカセサート大学やマヒドン大学およびベトナムのホーチミン市師範大学が研修先となっている。

ただし、これらの大学とは単位履修制度の設置にまでは至っていない。

（3）生徒の変化について

本校では、生徒の変容を図るために平成28年度より次のような自己診断やテストを行ってきた。

自己診断：「高志高生の意識・実態調査」

（1年生：4、2月　2年生：11、2月　3年生：7月実施）

論理的思考力・表現力 : GPS-Academic (1・2年生全生徒対象・12月実施)

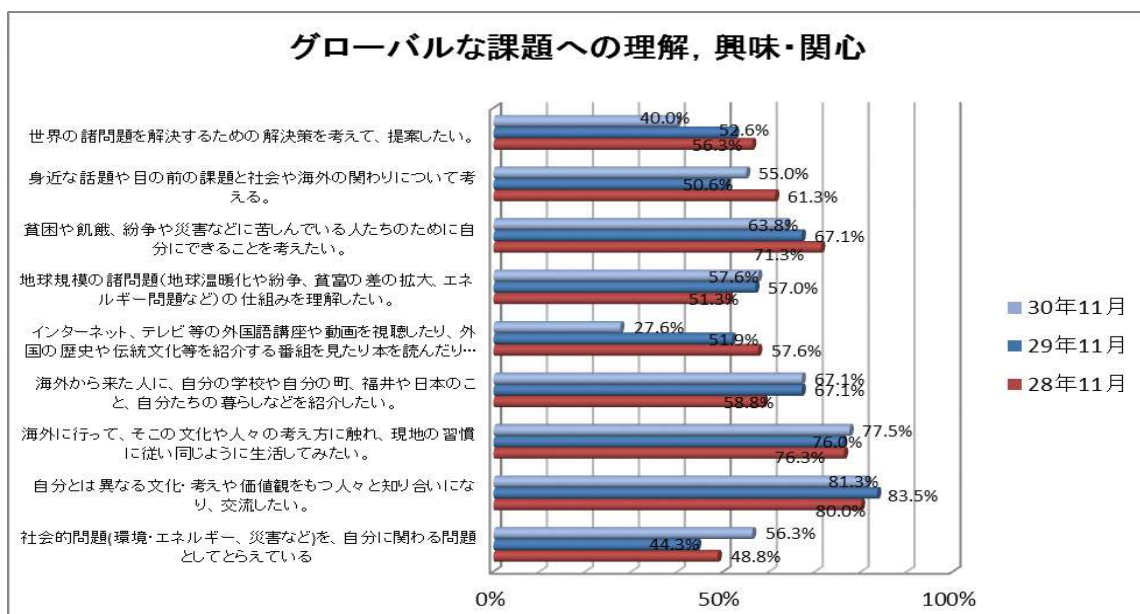
以下はその分析から見える生徒の変容についてである。

①自己診断「高志高生の意識・実態調査」から見える変容について

本校では平成28年度より、2年次の10月に選択型研修旅行を実施しており、学年の全生徒がいずれかの研修に参加している。(平成26・27年度はSGHにおいては希望制の研修旅行を実施)そのため一番生徒の意識に変化が起きやすいと考えた研修旅行後の2年次11月の意識実態調査について比較することにした。観点として次のア～ウを設定し、考察を行った。なお、各設問については、「とても当てはまる」を5、「まあ当てはまる」を4、「どちらでもない」を3、「あまり当てはまらない」を2、「全く当てはまらない」を1とする5段階評価をしてもらい、そのうち5または4と回答したものの占める割合をグラフで示している。

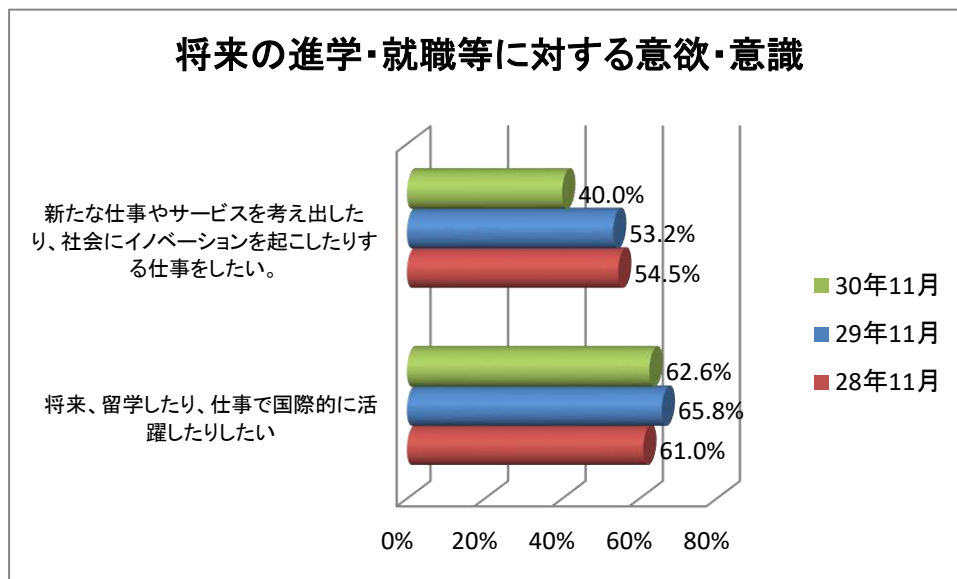
ア. グローバルな課題への理解、興味・関心について

「異文化交流・異文化理解」に関する質問(グラフ内5～8番目)のなかでも、異文化交流に関する項目に関しては、どの学年も80%程度の生徒が肯定的な回答をしているのに対して、「グローバルな視野」に関する質問(グラフ内1～4番目)および「関心度」に関する質問(グラフ内9番目の質問)においては、肯定的な回答をしている生徒の割合が50～60%程度となっている。海外研修で訪問先の高校生や大学生などと交流をしていく中で、「異文化交流・異文化理解」への関心を高めることはできている。しかし、その訪問国で実際に目の当たりにした実情や社会問題については、理解は進んでいるものの、自分の問題としてとらえ、それをどのようにして改善・解決していくといいのかという部分にまで、十分に意識を向けさせるような指導ができていなかったのではないかと考えられる。今後は、さらに一步踏み込んだ部分まで意識を向けさせる指導をどうすればいいのかを検討していかなければならない。



イ. 将来の進学・就職等に対する意欲・意識について

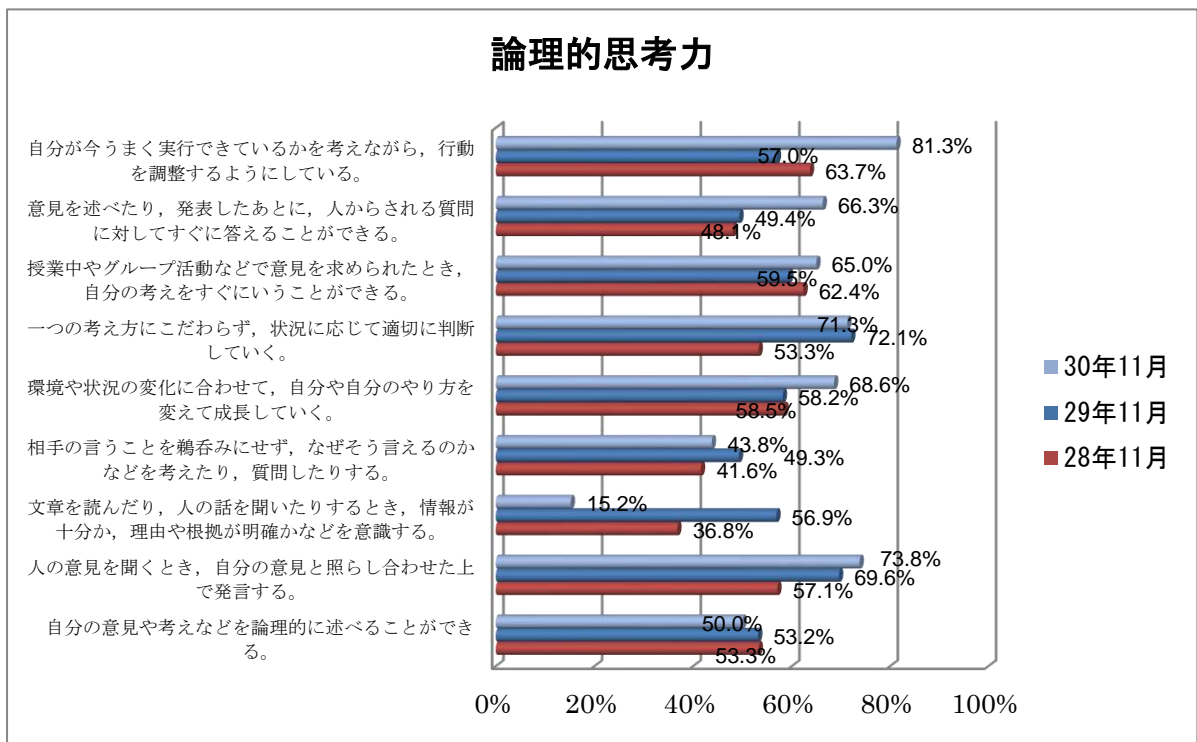
「将来、留学したり、仕事で国際的に活躍したりしたい」の質問では、どの学年も60～65%の生徒が国際的に活躍したいと考えていることが分かる。全体では45%程であることから、本校ではSGH選択生徒は継続して海外志向が高い状態を保っていることが分かる。また、「新たな仕事やサービスを考え出したり、社会にイノベーションを起こしたりする仕事をしたい」の質問では、平成28年度および平成29年度の生徒は55%程度の生徒が肯定的な回答をしているのに対し、平成30年度の生徒は40%程度となっている。全体ではどの年も40%程度であるため、この質問においても全体としてはSGH選択生徒の意欲の高さを示しているが、平成30年度2年生が他年度より低くなった理由については、今後、十分に考察していく必要がある。



ウ. 論理的思考力について

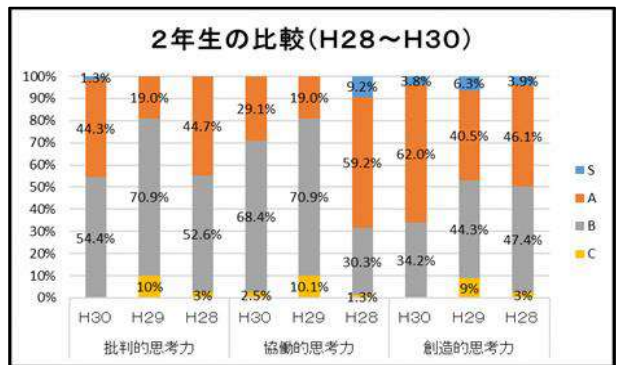
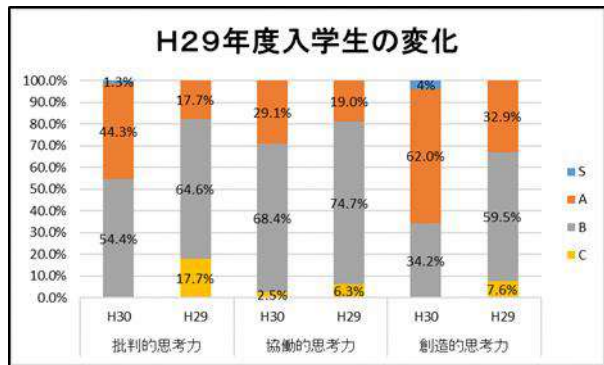
「調整力」に関する質問（グラフ内1番目）や「適応力」に関する質問（グラフ内4～5番目）には肯定的な回答している生徒の割合が高い。これは2年次に行う課題研究が通年でグループ活動を行うため、グループ内で違った意見が出た時や方向性の違いなどが出てきた時などに、調整をして一定の方針を定める力が身についてきたと感じているのではないかと考えられる。しかし、客観的に思考力を測定した「GPS-Academic」では、この部分にあたる「協働的思考力」の伸びは他の思考力より小さくなっている。この差が生まれている原因については今後の検証が必要である。

また、「批判的思考力」に関する質問（グラフ内6～7番目）に肯定的な回答をした生徒の割合は他の項目と比較すると低くなっている。様々な発表の場面で、資料や提案の根拠を求められる場面が多く、その場面でしっかりと説明ができなかったことなどが結果となっていると考えられる。こちらも、「GPS-Academic」では大きな伸びを示しており、今後の検証が必要な力のひとつである。



②論理的思考力・表現力「GPS-Academic」より

本校では客観的に生徒の論理的思考力等を測るために、1・2年生を対象に12月に「GPS-Academic」を平成28年度（1年生は29年度）より受験している。そのデータをもとに生徒の変容の考察を行った。



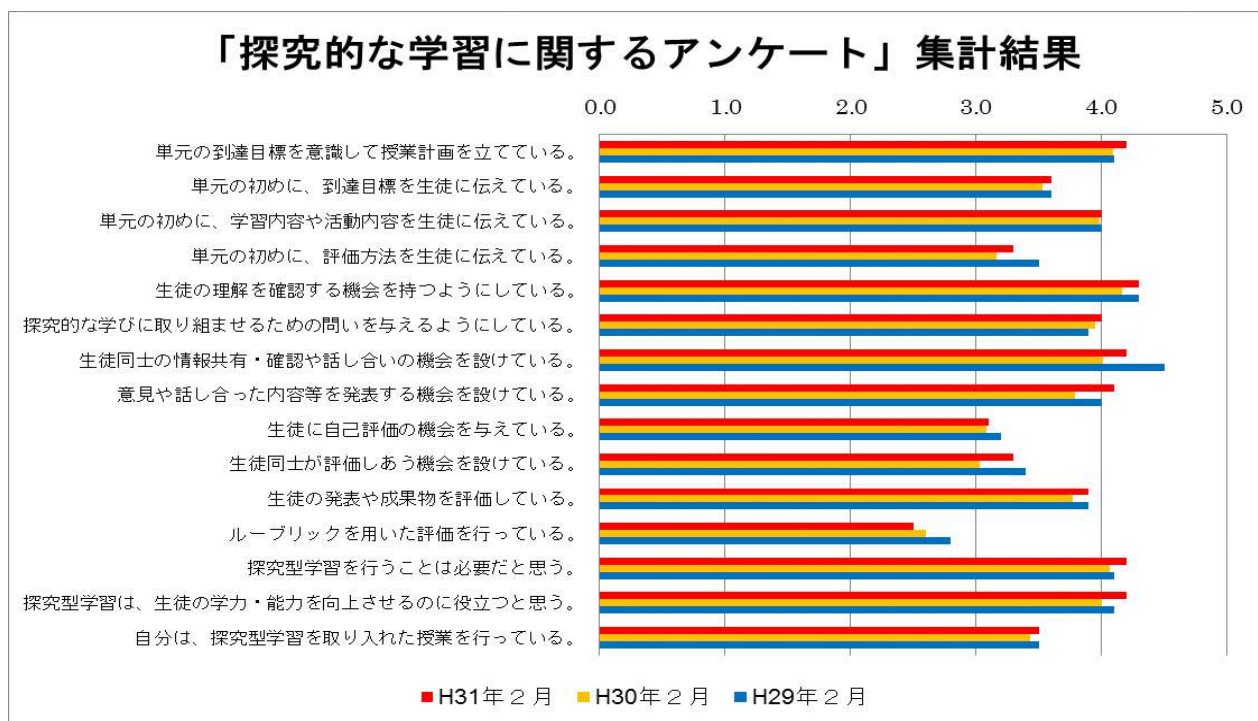
2年連続で受験した平成29年度入学生（現2年生）の変化をみると、批判的思考力・創造的思考力においてはS評価の生徒が一定数出てくるとともに、A評価を受ける生徒の割合も大幅に上昇した。課題研究を通して自分たちが収集したデータの整理やインタビューなどを通して、「必要な情報を取り出し、いろいろな観点から考え、自分の考えや筋道を立てて説明するための能力」や「情報をつないだり、別の場面に応用する力」が伸びていると考えられる。一方で上述した自己評価との差については検討しなければならない。

協働的思考力については、2年次にグループにおける通年の課題研究に取り組んだものの、思考力には大きな伸びが見られなかった。この点については、意見の出し合いはできているものの、そこから一歩踏み込んだ議論のすり合わせや指摘し合える環境が十分でなかったと考えられる。

平成28年度からの比較を見ると、平成28年度は協働的思考力が、平成30年度は創造的思考力が他の年度より高い評価を受けている割合が高くなっている。一方、協働的思考力において平成29年度、30年度は、28年度と比較するとA評価以上を受けている生徒の割合が大きく減少している。この点については、その年度の生徒の学力や課題研究で取り組んできた内容等にどの程度の差があるのかなどを詳細に分析していく必要がある。また、本校が目指してきた「SGHで育成したい生徒像」との関係も検証していかなければならない。

(4) 教師の変化について

平成28年度より「探究的な学習に関するアンケート」を授業を行っている全教員を対象に行ってきた。回答者には、それぞれの質問に対して「5. とても当てはまる」「4. まあ当てはまる」「3. どちらともいえない」「2. あまり当てはまらない」「1. 全く当てはまらない」のいずれかを選択してもらった。以下のグラフは3年間の推移を示すものである。



半数近くの項目で平均値が4を超えており、この間教職員を対象に取り組んできた「探究学習に関する校内研修」を通して本校教員の探究的な学習に対する考え方や意識を高めることができたと考えられる。

一方、「ルーブリックを用いた評価を行っている」は年を追うごとに数値が低下している。現在、全校的に通常授業において探究学習の推進を行っているところであり、その中で従来のテストなどによる評価と探究学習におけるパフォーマンス評価との併用で悩んでいる教員が一定数いるのではないかと考えられる。

(5) 学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

授業においては、通常授業におけるPBL型学習の導入がある程度進んできた。（4）で示した「探究的な学習に関するアンケート」からも、「探究的な学びに取り組ませるための問いを与えるようにしている」や「探究型学習は必要である」、「自分は探究型学習を取り入れた授業を行っている」の質問では回答の数値が3.5～4となっており、通常授業の変化を意識していることが分かる。また、運営指導委員会等において公開した授業に対し、「通常授業において探究型学習につながるようなさまざまな手法を使って授業が行われており、通常授業の改善が進んでいる」等の指導も受けている。

指定終了後も、通常授業の改善は続けて進めていくことになっている。

(6) 課題や問題点について

①評価について

評価の方法については、課題を残したと考えている。生徒の成果物や発表等をルーブリックを用いて評価する方法を取ってきたが、（4）で示した「探究的な学習に関するアンケート」を見ると「ルーブリックを用いた評価を行っている」の数値は年を追うごとに低下しており、校内全体でルーブリック評価の在り方や必要性、またその内容等について十分に意思の疎通や理解がされていない部分があった。

②通常授業における生徒の変容について

先述のように教員側は、通常授業の改善を意識して行ってきたが、それにより生徒がどのように変化したのかを客観的に示すデータを取ることができなかった。

③生徒の積極性について

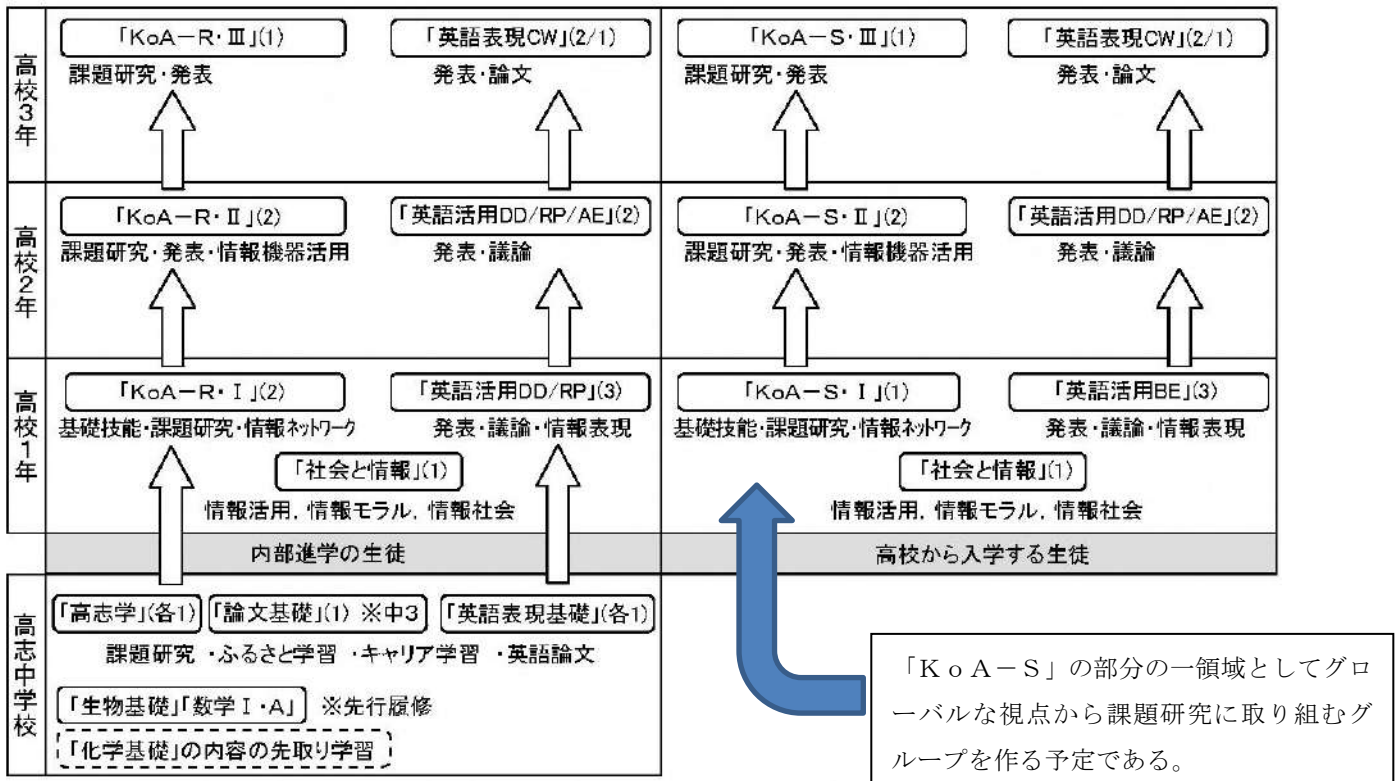
運営指導委員会等で「発表後の質問が少ない」、「質疑応答時の様子が大人しい」、「議論や発表時の声が小さい」などの指摘をたびたび受けた。普段の授業で発表や議論、質疑応答などの場面を増やすなどの工夫が必要であった。また、今後も海外交流も含めて、他者との出会い・交わりの機会を増やし様々な刺激を与えることによって、生徒の前向きな姿勢を育成する必要がある。

④外国人教員の雇用について

「グローバル探究」、「アジアの歴史・経済」「アジアの自然・文化」等学校設定科目で外国人教員を雇用し、指導をしてもらう予定であったが、適任者を見つけることができず、指定期間中を通して雇用することができなかった。

(7) 今後の持続可能性について

本校はSSHの指定も受けており、全校生徒がSGHもしくはSSHのどちらかに属しているため、全校で探究的な学習に取り組む体制がすでにできあがっている。そのため、指定が終了してもSGHで行ってきた活動をSSHの一部門としてそのまま継続して行っていく予定である。具体的には以下の図のとおりである。



1年生では引き続き、福井経済同友会の支援を受けながら県内企業でグローバル展開を行っている企業による連携授業を行っていく予定である。また、5年間行ってきた京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科訪問研修も継続していく。

2年生においても指定期間中に継続して行ってきた、福井を世界に発信する通年型課題研究を行っていく。次年度に関しては、可能な限り企業とコラボレーションをし、福井を発信できる商品開発の研究を行う予定である。また、10月第4週に行ってきた海外・国内フィールドワークも継続することが決定したため、このフィールドワークを利用して課題研究の調査等を実施していく。

3年生においては、今年度より開始した、個人研究（「2年次の研究テーマを継続」もしくは「イノベーションプラン提案になるもの」）を引き続き実施していく予定である。

また、管理機関の予算を使って行ってきた事業（「グローバルミニ講演会」など）については、管理機関と連携を取りながら継続できるものについてはできるだけ続けていくようにしていく予定である。

【担当者】

担当課	福井県教育庁高校教育課	TEL	0776-20-0570
氏名	岩本 公信	FAX	0776-20-0669
職名	指導主事	e-mail	h-iwamoto-bi@pref.fukui.lg.jp